

巻頭言

後に続く者を信ず

本誌8月号の特集記事「任期付任用公務員としての弁護士活動～経験弁護士へのインタビュー（金融庁・証券取引等監視委員会）」を読み、この制度が任用された若い弁護士と受け入れ側の行政庁の双方にとって多くの効果をもたらしていることを知って、大変嬉しく思った。1960年代の初めに典型的なウォールストリートのロー・ファームで実習し、いわゆるリボルビング・ドアで弁護士達が容易に各種の政府機関で経験を積むことを目の当たりにし、羨ましいと思ったし、またその後随分経って、ある案件に関して時のクリントン政権の国務長官クリストファー氏（米国西海岸の大ロー・ファームのパートナー）直々のインタビューを受けた時、すぐに私の事務所にやって来た身軽さや、私の答えを手早くノートにとって行く姿に身近さを感じ、現役の弁護士が政府の高官になるとこういうものかと興味を覚えたりしたが、リボルビング・ドアは日本では夢でしかなかった。それが、限られたものではあれこうして日本でも実現したことは、日本の弁護士の専門的能力と識見の向上に資するものであり、慶ばしい。とりわけ、任用された若い弁護士が、高度の専門家としての自分のキャリア形成についてしっかりした考えを持って、多様の人たちと協力しながら公務を遂行し、法規正の適正で健全なあり方などに貢献していることに手応えとやり甲斐を感じながら多忙な毎日を送っていることに、心強さを覚えた。

よくみると、外にも若い弁護士の中にもいろいろ頼もしい人たちが少なくない。例えば、発足して間もない小企業の発展を支援することに重点をおいて、公認会計士、税理士、弁理士、社労士を擁して成果を挙げている人もいるし、また、自らの行政庁での経験を活かして行政法学者の友人と2人で行政関係の事案に特色のある法律事務所を起ち上げようとしている人もいる。さらに、中国の模造



長島 安治（5期）

品退治に熱中している人もいる。また、米国の大ロー・ファームのパートナーとして成功を収めながら、国際関係で日本人が他国の人たちに太刀打ちできる人材育成の必要性を痛感し、そのため、収入の激減を厭うことなく、公立高校の校長となって生徒の英語力向上に献身している人もいる。

第二次世界大戦中、香港攻略に若き中隊長として偉功をたてた後、補給の絶えたガダルカナルで中隊長を心から信頼する多くの部下と共に飢えに耐えつつ苦闘、遂に「後に続く者を信ず」という言葉を残して戦死し、軍神と讃えられた若林東一大尉は、陸軍士官学校を首席で卒業した私より7期上の先輩であった。

黄泉近し兵士に遭はば問はれなむ

護りし国の今は如何にと

三谷 欣也

これは、今年になって私が最も胸を打たれた短歌である。巨大震災、巨大津波、原発事故がもたらした三重の苦難の克服は果たして成るのだろうか。兵士に遭えば私はこう答えよう。「あなた方のお陰で日本は敗戦の惨禍から立派に立ち直り世界第2位の経済大国になりました。ただ、そのことに慢心したためか、20年ほど前から政治でも経済でも世界の中で日本の存在感は下り続け、中央・地方の政府の膨大な借財や人口の止まることない減少などと相まって、今回の天災人災は日本の衰亡の始まりにも見えます。しかし、日本の若い人たちの中には、我々戦中派の時代の多くの日本人より広い見識と高い能力を持ち、また自らの信ずるところに従って犠牲をも厭わない優れた人材が少なくありません。私もまた、後に続く者を信じます。」と。

